運命か、偶然（ランダム）か。男と女の出会いはいつも謎だ。

連載

あのシーン、あのセリフ、あの仕草、
忘れられないことばかり。

# さあ、映画の話をしよう。

金丸弘美
フリーエディター

## 大人のクリスマス

### 映画『ランダム・ハーツ』より

『go』（一九九九）という面白い映画を見た。クリスマス・イブの日、三組の若者の三者三様の出来事が、オムニバスで語られる。

スーパーのレジの女の子ロナは家賃滞納で家を追われている。そんなときスーパーに来たアダムとジャックに「錠剤のエクスタシーを手に入れてくれ」と、突然言われ、お金欲しさに麻薬ディーラーのところへ行くことになる。

ロナを口説いて断られてばかりいたサイモンはラスベガスへ。結婚パーティーに紛れ込み、女の子に誘われ、なぜかもてもて。しかし、とんだハプニングが待ち受けていた。

アダムとジャックは、実は昼メロの俳優。麻薬保持で逮捕状が出ていて、警察の囮捜査に協力させられることになったのだ。それで、あの子なら薬を持っているに違いないとロナが口説かれるはめになる。

それぞれにクリスマスを楽しむどころかとんでもない事件に巻き込まれる。だけどこれが結構間が抜けていて、笑ってしまうのだ。しかも三人は接点があり、同時間に話が進展していく。いわばクリスマス若者版『パルプ・フィクション』（一九九四）といった趣だ。

この映画に共感できるのは、格好良くすればするほど、どんどん失敗に繋がるところで、そのずれた感覚が最高におかしい。この映画ほどにデフォルメされなくとも、現実は、自分たちも間の悪いときは、結構『go』の主人公たちと同じようなことをしているに違いない。

でもクリスマスは、やはりロマンチックでありたいですね。

例えば大好きなビング・クロスビーとダニー・ケイの『ホワイト・クリスマス』（一九五四）。これは軍隊時代の元隊長のペンション経営がおもしろくなく、それを助けるために二人の芸人がショーを開くというお話だが、ラストのドレスアップした観客がシャンペングラスで、イブを祝うところはやはりいつ見てもいい。ショーの舞台ではツリーがあって、そこへクロスビーに恋をしている歌手のローズマリー・クルーニーが、プレゼントをサンタクロース姿のクロスビーの袋にそっとしのばせる。これが白馬の王子様。それで恋心を伝える心憎さ。こんなところは、とても憧れる。

もっとも大人ともなると家族もいて、多くは『ホーム・アローン』（一九九〇）のように家族でパリ休暇、『ホーム・アローン2』（一九九二）ではマイアミというようなことになるのだろう。でも家族旅行でも、実にロマンチックなイブだったのは、『世界中がアイ・ラブ・ユー』（一九九六）だった。

ゴールデン・ホーンの家族はパリでクリスマスを過ごす。そしてここに前の夫のウディ・アレンも合流して、参加するのがシネマ・パーティーなるもの。マルクス・ブラザーズのショーがビッグバンドで繰り広げられ、マルクスの扮装で、みんなは踊りシャンペンを交わす。

アレンがそっと元妻のホーンを誘い、連れて行ったのは婚約前にクリスマスを過ごしたセーヌのほとり。

「僕らは夫婦以上にいい友達かもしれない」

「そうかもね」

酸いも甘いも知った、そこには大人がいた。

踊りもパーティーもなかったが、大人を感じさせたクリスマスは、最新作『ランダム・ハーツ』（一九九九）だ。巡査部長のハリソン・フォードと下院議員のクリスティン・スコット・トーマスと、ある事件をきっかけに惹かれあう、大人のサスペンス・ラブロマンス。

彼女に会いたいフォードは、遊説中の彼女を空港のバーで待ち受ける。それはクリスマスの日。会いたかったことを告げると、彼女はフォードの胸に手をあて、

「あなたが私の最高のクリスマス・プレゼントよ」と、語るのだ。

「僕は君になにをあげよう。君の家に電話するよ。そうだ映画に行こう」

「それも悪くはないわね」

大人のクリスマスは、シチュエーションもさることながら、やはりいい会話が、あるものだ。

原題：RANDOM HEARTS／監督：シドニー・ポラック／出演：ハリソン・フォード、クリスティン・スコット・トーマス、チャールズ・S・ダットン／'99年米作品／132分
解説：ワシントンD.C.警察の巡査部長・ブロック（ハリソン・フォード）は、出張中の妻を飛行機事故で亡くすが、その後、次々と妻の嘘が発覚していく。
●12月18日より、東京・日比谷みゆき座ほか、全国東宝洋画系にて公開。

かなまるひろみ●フリーエディター。一線の編集者とライターの集い、ライターズ・ネットワークの、ゲストを招く勉強会が50回目に。51回目はロンドンからエッセイスト岩野礼子さんを招き、9年ぶりの再会。